

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19720117

研究課題名（和文）

日英語の多次元事態認知に関する研究

研究課題名（英文）

A Study on Multidimensional Event Construals in Japanese and English

研究代表者

町田 章 (MACHIDA AKIRA)

長野県短期大学・多文化コミュニケーション学科・准教授

研究者番号：40435285

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：① 言語学 ② 英語 ③ 国語学 ④ 認知科学

1. 研究計画の概要

- (1) 本研究の目的は、Langacker (1999)において提案されているプレーンモデルやLangacker(1993)において提案されている参照点構造モデルを発展させた多次元事態認知モデルを提案し、これを用いて日英語の文法現象を解明することにある。本研究で多次元事態認知モデルの必要性を主張するのは、行為連鎖だけに着目した従来の研究スタンスでは様々な認知的要素を簡略化しすぎてしまい人間に本質的な複合的な認知作用を正しく捉えることができないと考えるからである。
- (2) 研究スケジュールとしては、国内学会と国際学会における研究発表を柱に研究を組み立てる。国内では、日本認知言語学会、日本英語学会、日本言語学会等において研究発表を行うことを目標とする。このように積極的に学会発表に応募するのは、研究に細かい期限を設けるためである。期限を設けることにより、研究の停滞を防ぐ措置が取れるからである。

2. 研究の進捗状況

以下に研究成果の刊行状況を報告する。

- (1) 日本語受動文に働く視点制約に関する研究。日本語の受動文がどのような認知メカニズムに動機付けられているのかを明らかにした。その結果、一見、視点制約に違

反するよう見える事例の背後にある事態把握のあり方が明らかとなった。これは、受動文を研究する際に、他動性という1つの尺度だけでなく、多次元的なプレーンの存在を仮定する必要があることを示すものである。（「視点制約と日本語受動文の事態把握」）

- (2) 多次元プレーンモデルによる構文の拡張に関する研究。特に、日英語の受動文を取り上げ、従来型の事象叙述と属性叙述という分類では記述的にも妥当性を欠くことを指摘した。その上で、Langackerの認知文法の枠組みを応用した多次元プレーンモデルを採用することにより、記述的な妥当性だけでなく、より深い認知メカニズムまでも明らかにされることを主張した。（「多次元プレーンモデルによる構文の拡張—日英語の属性叙述受動文—」）
- (3) 日英語の他動性の低い受身文に出現する被害性に関する研究。被害性は、単なる他動性の延長ではなく、語用論的強化によって構文に付与された意味であることを論証した。そして、他動性が低い場合に被害性が顕著になる理由を、その背後にある推論における参照点構造において、プロファイルシフトという認知現象が生じているためであると結論付けた。（「被害性と語用論的強化—日英語の受身文を例に—」）
- (4) 日本語被害受身文において参与者項が増

加する現象に関する研究。事態認知において参与者項が増加する理由を参照点構造にあるとし、事態に内在的な参照点構造の拡張のメカニズムを詳細に検討した。
(‘Reference Point Structure in Japanese Adversative Passives’)

- (5) ラレル構文の拡張に関する研究。本研究では日英語を特徴づける際に観察される事態内視点という概念を Langacker のステージモデルに組み込むための修正案を提案した。ここで提案された修正案を用いると、日英語の類型論的特徴だけでなく、従来のモデルで見過ごされていた僅かな意味の差異も明示的に記述できることが示された。そして、この図式を日本語のラレル構文に適用することによって、自発から可能を経て受身へとラレル構文が拡張する認知メカニズムが明らかにされた。(「言語表現に見られる主体性—ラレル構文を例に—」)
- (6) 人間の事態把握のモードとして事態単位事態把握と参与者単位事態把握が存在することを提案した研究。特に、参与者単位事態把握では、通常、主語以外の位置に生ずる要素が、主語として表現されるようになるメカニズムが明らかとなった。これにより、中間構文、tough 構文、受身文などに見られる共通性を認知文法の図式で正しくとらえることができることを示した。(「事態把握の類型—属性叙述文の認知図式化に関する提案—」)

3. 現在までの達成度

- ②おおむね順調に進展している。
(理由)
- (1) 当初の計画通り、年に1回のペースで各学会において研究発表が採択されている。ただし、2008年度に米国において開催予定であった国際認知言語学会(ICLC 11)が実行委員会の不手際により開催中止になってしまったため、採択されていた研究発表が中止になってしまった。これにより、研究に大幅な遅れが出てしまった。
- (2) 上記の遅れにもかかわらず、研究内容において大きな進展があった。多次元事態認知モデルは当初プレーンモデルと参照点構造を援用して組立てていく予定であったが、事態認識のモード(事態内視点・事態外視点)を組み入れる必要があることが判明した。これは大きな進展であるといえる。
- (3) 更に、この事態内視点という概念を精緻化していく際に、Langackerの主体化のモデルの不備を発見することができた。これは研究の副産物ではあるが、認知言語学の発展に寄与するものと思われる。

以上、3点を総合的に判断すると研究は順調に進展していると結論付けられる。

4. 今後の研究の推進方策

- (1) 本年度は、最終年度であるため、研究に一つの区切りをつけたい。特に、プレーンモデル、参照点構造、事態内視点という三つの道具立てを援用した日英語の受身文についての研究を論文の形にまとめたい。
- (2) 上記の日本語受身文に関しては、日本言語学会第140回大会(於 筑波大学、2010年6月19日)における研究発表に採択されている。発表題目は「主観的状况と日本語受身文」である。

5. 代表的な研究成果

[雑誌論文] (計4件)

- ① 町田章「言語表現に見られる主体性—ラレル構文を例に—」『長野県短期大学紀要』64号, 103-114, 2009, 査読なし。
- ② Machida, Akira ‘Reference Point Structure in Japanese Adversative Passives,’ Osaka University Papers in English Linguistics 12 (OUPEL 12), 79-98, 2008, 査読なし。
- ③ 町田章「被害性と語用論的強化—日英語の受身文を例に—」『長野県短期大学紀要』62号, 115-121, 2007, 査読なし。
- ④ 町田章「多次元プレーンモデルによる構文の拡張—日英語の属性叙述受動文—」『日本認知言語学会論文集 第7巻』(JCLA 7), 416-426, 2007, 査読あり。

[学会発表] (計3件)

- ① 町田章「主体性とラレル構文」日本言語学会第139回大会, 神戸大学, 2009年11月28日, 査読あり。
- ② 町田章「事態把握モードと参照点構造—日本語「ハ」の認知構造—」日本言語学会夏期講座2008 ナイトセッション, 京都大学, 2008年8月22日, 査読あり。
- ③ Machida, Akira ‘Reference Point Structures in Japanese Adversative Passive,’ 10th International Cognitive Linguistics Conference, at Krakow Poland, 2007/07/18, 査読あり。

[図書] (計2件)

- ① 町田章「事態把握の類型—属性叙述文の認知図式化に関する提案—」『英語研究の次世代に向けて 秋元実治教授定年退職記念論文集』吉波弘, 中澤和夫, 武内信一, 外池滋生, 川端朋広, 野村忠央, 山本史歩子(共編), ひつじ書房, 213-225, 2010年。
- ② 町田章「視点制約と日本語受動文の事態把握」『ことばと視点』河上誓作・谷口一美(共編), 英宝社, 104-118, 2007年。